

地区名	みよし	学校名	みよし市立三吉小学校	執筆者	片倉 茉 優
テーマ 単元名	体験や出会いを通して自分の生き方を考える総合的な学習の授業 第6学年「ともに歩く～アルコバレーノ大作戦～」の実践を通して				

1 はじめに

本校の児童は、5年生での野外学習において自然のすばらしさを経験したことにより、自然環境を守り、持続可能な社会をつくるために自分たちにできることはないかと考え、SDGs のなかでも環境分野に関心をもち、意欲的に学習に取り組んだ。その一方で、小学校生活の前半は、コロナ禍による様々な制限を受けていたこともあり、様々な人と触れ合う機会が少なかった。そのため人前で話すことをためらい、他人と関わることが苦手な児童もいる。

このような児童に、6年生では SDGs の他の目標にも興味をもち、様々な体験や人やこととの出会いを通して、持続可能な社会の構築のために自分たちができることを考え、行動できるようになってほしいと願い、研究テーマ「体験や出会いを通して自分たちの生き方を考える総合的な学習の授業—第6学年「ともに歩く～アルコバレーノ大作戦～」の実践を通して—」を設定した。

単元名の「アルコバレーノ」とはイタリア語で虹を意味し、人と人とを繋ぐ架け橋をイメージしている。児童の思考をもとに福祉に目を向け、様々な人との出会いや体験をすることで、だれもが健康で幸せな生活を送れるようにするために、自分たちができることを考えてほしい。そのことが今後の彼らの人生を豊かにするとともに、社会における人と人との架け橋になるのではと考えている。

2 研究の目的

(1) 目指す児童像

- ①人にはそれぞれ違いがあり、個別のよさをもっていることを理解し、自己の生き方にいかそうとする児童
- ②福祉に関心をもち、すべての人が幸せに暮らせるために、自分にできることを実践する児童

(2) 研究の仮説と手だて

<仮説1>

課題設定や情報収集の場面において、ゲストティーチャーとの連携や様々な出前授業を設定することで、福祉に対する考え方が広がり、自己の生き方にいかすことができるだろう。

<手だて①>

実際に体験したからこそその気付きや疑問を抱くことができるように、車いす体験、点字体験、パラスポーツ体験などの複数の出前授業を設定する。

<手だて②>

みよし市の取組を知り、自己の生き方にいかすことができるようにするために、みよし市社会福祉協議会と連携し、年間を通じて関わりをつくる。

<仮説2>

まとめ、表現する場面において、学びを発信する機会を積み重ねることで、伝えたい気持ちや、行動力が高まり、自分にできることを実践しようとするだろう。

<手だて③>

学びを発信する場として「アルコバレーノフェスタ」を行う。また、対象を変えて3回行うことで、できたことや改善点を振り返り、自分にできることを見つけ次につなげられるようにする。

<手だて④>

校内だけではなく広く学びを発信する機会としてみよし市 SDGs フォトコンテストに応募する。

3 単元構想図

学習過程	学習活動	主な手立て	他教科との関連
課題の設定 情報の収集 整理・分析 まとめ・表現	<p>第1次 1年生とともに歩く（10時間）</p> <p>○1年生の朝の準備や掃除・給食のお手伝いをしよう① ・名札を自分でつけるのが難しそう。 ・1年生はそうじの仕方を知らない。 ○1年生との関わりで気付いたことや教えてあげたいことを考えよう②③ ・給食の準備・片付けは時間がかかるから、しばらく観た方がいいと思う。 ・教えるときは難しい言葉だと選んじゃったから、どんな言い方がいいのかな。 ○1年生が楽しめるような「1年生を迎える会」を計画しよう④～⑦ ・1年生が学校のことをわかるように、学校ガイドをやらそう。 ・1年生でもルールがわかるようにけんけん大会はどうだろう。 ○1年生が楽しめるような「1年生を迎える会」を開き、1年生との関わりを振り返ろう⑧～⑩ ・1年生の喜ぶ顔が見られてうれしかった。 ・1年生にもわかるような言葉遣いやゆくり語すことを意識したよ。 ・自分の行動でありがとうと言ってもらえてうれしかったな。他にも自分ができることはないかな。</p> <p>様々な人との関わりで自分たちには何ができるのだろう。</p>	<p>・異学年交流の一環として、1年生の朝、給食、掃除の手伝いの時間を設定する。</p>	<p>【道徳】 「心づかいと思いやり」目には見えない配りの大切さについて知る。</p>
課題の設定 情報の収集 整理・分析 まとめ・表現	<p>第2次 障がいのある人やそれを支援するしくみを調べて発信しよう（25時間）</p> <p>○SDG 8のたししよう①② ・5年生のときは環境について詳しく学んだけど、それ以外にも多くの項目があるね。 ・世界にはたくさんの方が協力して、解決しないといけない課題がたくさんある。 ・みんなが幸せに暮らせるようになりたい。 ○全ての人とどんな人がいるのか考え、「福祉」の言葉の意味を考えよう③ ・女、男、お年寄り、障害、自分、障がいをもつ人、外国人、様々なジェンダー、民族、赤ちゃん ・ふくしは「ふだんのくらしのしあわせ」という意味だとわかった。 ・SDG 8には、「すべての人に健康と福祉を」という目標があったな。 ○アイマスク体験をして目の不自由な人やサポートする人の体験をしよう④⑤ ・目が不自由だと大変で、つまずきそうでもわかったけど、右に曲がるよとかの声掛けがあると安心した。 ・一緒に歩くときにスピードを合わせるのが大変だ。 ・目の不自由な人が使っている白杖について知りた。車いすの体験もしてみたい。 ○社会福祉協議会の方を招き、車いす体験をしよう⑥⑦ ・段差を超えるのが難しかったけど、友達をサポートしてくれたらか運ることができた。 ・他の障がいについても知りた。身の周りの道などにも目を向けてみたいな。 ・障がいをもつ人も私たちと同じように生活しているのがわかった。 ○夏休みに身近なUDやバリアフリーを見つめよう(夏休み) ・駅員さんが車いすの人が通れるように合を合っていたよ。 ・学校にも多目的トイレがあったみたい。ショッピングモールにも多目的トイレがあった。 ・コンビニで耳マークを見つけて、指差して自分の気持ちを伝えられるようになっていたよ。 ○社会福祉協議会の方を招き、点字体験をしよう⑧⑨ ・点字ブロックの上に荷物を置かないようにしたい。 ・身のまわりにある点字を探してみたいな。 ・点字を覚えるのはどれくらい時間がかかるのだろう。 ○パラスポーツ選手を招き、競技用車いす体験をしよう⑩⑪ ・日常の車いすと比べるとタイヤの形が違った。 ・脚りをもつてスポーツに取り組む姿がかっこよかった。 ・義足を初めて見たけど、どのようになっているのだろう。 ○学習計画を立てよう⑫ ・バリアフリーという言葉を知ったから、身の周りのバリアフリーをもっと調べたいな。 ・車いすの上・パラ陸上みたいに他にも障がい者スポーツについて調べてみよう。 ・車いすマークや耳マークなど、マークについてもっと知りた。 ○身体の不自由な人のくらしを支えるものやことについて情報を収集し、それを発信する方法を話し合おう⑬～⑮ ・車いすのマーク「国際シンボルマーク」は世界共通のマークだから、マークに関する発表をしたい。 ・新聞紙にもUDが使われているから、それをポスターにして伝えよう。 ・いざというときに手助けできるように、車いすの体験をして伝えるのはどうかな。 ○「学年アルコバレーノフェスタ」の準備をしよう⑯～⑳ ・伝える相手に体験してもらえようとするのがわりとやさしいかな。 ・点字ブロックがある場所とない場所を写真として伝えると身の周りの支援の工夫が伝わるかな。 ・自分たちが何なことをしたいかをみんなに広めるのはどうかな。 ・スライドを作るときは、教科書みたいにUDフレンドリーを使ってみよう。 ○「学年アルコバレーノフェスタ」を開催し、活動を振り返ろう㉑～㉓ ・もっと色々な人に伝えたい。 ・他にもみんなに伝える方法はないかな。 ・自分ができることも探してみればまだあるかもしれない。</p> <p>「アルコバレーノフェスタ」をさらによくするための作戦をたてよう</p>	<p>・学びの振り返ることができるように、学びの足跡を掲示する。 ・全ての人を連想しやすくし、視覚的にわかるようにウェブページを用いる。 ・「ふくし」という言葉に着目できるように、福祉読本「ともに生きる」を提示する。 ・障がいをもつ人やその暮らしを支える仕組みや人々を体験できるように、社会福祉協議会と連携する。 ・夏休み期間を使って身の回りのUDやバリアフリーに目をめけることができるように、調べの機会を設ける。 ・障がい者スポーツを体験できるように、トヨタ自動車からパラアスリートやゲストティーチャーとして招く。 ・障がいをもつなかで活躍している様子を身近に感じられるように、パリア五輪、パリアパラリンピックが開催する時期に合わせて実施する。 ・自分でもできることを考えられるように、調べたことを実践したり、試したりする時間を設ける。 ・取組を広げられるように、市主催の「SDG 8フォトコンテスト」に応募できるようにする。 ・仲間の取組から自分の活動を振り返ったり、計画を考え直したりできるように、調べ学習の途中経過を掲示する。 ・より自分事として考えられるように社会福祉協議会の方にアドバイスをもらえるようにする。</p>	<p>【社会科】 「わたしたちのくらしと日本国憲法」 基本的な人権の尊重や「ユニバーサルデザイン」を知る。(UD)を知る。</p> <p>【道徳】 「アスリートの言葉」 支え合いや助け合いなどのつながりのなかで生きていくことを知る。</p> <p>【国語】 「いざというときのために」 相手に分りやすいように、読得の工夫を学習する</p>
課題の設定 情報の収集 整理・分析 まとめ・表現	<p>第3次 さらに自分たちができることを広めて発信しよう（20時間）</p> <p>○福祉協議会の方にアルコバレーノフェスタのアドバイスをもらおう㉔ ・できないことはみんなに伝えてしまっていたな。 ・スライドでも実際に見る方がいいかもしれない。 ・自分たちができることが他にもあるかもしれない。 ○パラスポーツ選手の生き方や思いを聞こう㉕ ・パラスポーツで活躍しているかっこいいな。 ・自分に脚りをもつてスポーツを楽しんでいるのが印象に残った。 ・かわいそうという見方はよくないことだ。 ○学習計画を立てよう㉖ ・義足や義手をつくる職業について調べたいな。 ・障がい支えるボランティアの人に話を聞いてみたいな。 ・介護士の仕事を調べてみようかな。 ○身体の不自由な人のくらしを支える人について情報を収集し、それを発信する方法を話し合おう㉗～㉙ ・社会福祉協議会の方は、車いすを誰にでも貸し出せるようにしているから、それを広めたい。 ・義肢装具士は、一人一人のくらしに合わせてつくることを学んで、障がいといっても一人一人の違いがあるからその人の思いを大事にすることを伝えたい。 ・目が不自由な人は声掛けがあると安心すると言っていたから困っていたら声掛けをすることを広めたいな。 ○「みんなで築こうアルコバレーノフェスタ」の準備をしよう㉚～㉜ ・障がいについてマイナスイメージばかりが伝わらないようにセリフを変えよう。 ・社会福祉協議会の人から学んだことを伝えられるようにしよう。 ・みんなにもできることを実践してもらえよう。自分たちのこれからの行動や意志を伝えよう。 ○「みんなで築こうアルコバレーノフェスタ」を開催し、活動を振り返ろう㉝ ・みんながすぐできることを強く伝えることができた。 ・これからも困っている人を見かけたら、声をかけてあげたい。 ・介護士のことを調べていくなかで人を支える仕事に興味が出てきたな。</p> <p>すべての人が今よりもっと幸せに暮らせるために自分ができることはなんだろうか。</p>	<p>・自分たちの学びを広げることができるように、学芸会を使って劇やダンスで自分たちの思いを表現できる場をつくる。 ・障がいをもつ人の生き方や思いに触れることができるように、パラアスリートやゲストティーチャーとして招く。 ・情報を収集する際にインタビューができるようゲストティーチャーを招き、質問できる場を設定する。 ・校内に呼びかけがおこなえるように、アルコバレーノフェスタを実施する場所を確保する。 ・改善点を見つめ、次に繋げることができるようにするため、学びを様々な人に伝える機会を持つためにアルコバレーノフェスタを2回行う。1回目は授業参観で保護者に向けて、2回目は5年生に向けて行う。</p>	<p>【国語】 「プレゼンテーション」 情報をまとめ、資料を使って発表する。</p> <p>【道徳】 「その思いを受けついで」 情報の収集の際にインタビューができるようゲストティーチャーを招き、質問できる場を設定する。</p> <p>【国語】 「発信しよう、私たちのSDG 8」 相手や目的に応じて、情報を集め発信する。</p>
課題の設定 情報の収集 整理・分析 まとめ・表現	<p>第4次 三吉小学校のみんなとともに歩く（15時間）</p> <p>○下学年に自分たちができることを考えよう㉞ ・困っている人を助けよう。声をかける大切さを学んだから学校で困っていることがないか探そう。 ・下学年のためにありがとうという感謝の気持ちを伝えたいな。 ・みんながしあわせで思えるような企画をするのはどうかな。 ○卒業プロジェクトの計画をたてよう㉟ ・感謝の気持ちをこめて学校をピカピカにしよう。 ・学校がきれいになるとみんなが気持ちよく過ごせていいね。 ・困っていることがないかアンケートをとろう。 ○卒業プロジェクトを準備し、今までの学びを振り返ろう㊱～㊳ ・1年生の喜ぶ顔がうれしかったから、これからの学びを振り返ろう。 ・みんなそれぞれの長さがあって、みんな違ってみんなすばらしいね。 ・募金とか自分ができることに協力していきたいな。</p> <p>これからの自分の生き方を考えよう。</p>	<p>・今までの学びを想起できるように、ワークシートや学びの足跡を振り返る機会を設定する。</p>	<p>【音楽科】 「世界に一つだけの花」 福祉で学んだ手話を使って、手話ソングで表現する。</p> <p>【国語】 「伝えよう、感謝の気持ち」 感謝の思いを伝えるための方法を考える。</p>

【単元終了後の児童に期待する姿】
 ・人にはそれぞれ違いがあり、個別のよさをもっていることを理解し、自己の生き方について考えようとする。
 ・福祉に関心をもち、すべての人がしあわせに暮らせるために、自分ができることを実践しようとする。

4 研究の実践と考察

(1) 複数の出前授業の設定（手だて①）

児童の多くは障がいのある人との関わりがこれまでほとんどなかった。多様な体験活動を取り入れることで、児童の視野が広がると考えた。そこで単元構想における第2次では点字や車いす体験、義足体験、ポッチャ、競技用車いす体験など多くの出前授業での体験活動を取り入れ、様々な人との関わり場の場を設定した<資料1>。



<資料1：義足体験の様子>

また、体験活動を充実させるとともに、体験で感じた思いや疑問を整理し、後から思い出すことができるように毎授業の最後に振り返りを書くようにした。点字体験の後の振り返りでは、点字で話したいという思いや、次は白杖や耳の不自由な人について知りたいという新たな関心が生まれている<資料2>。またパラスポーツ体験後の振り返りでは、「不自由やかわいそうとか思わず、不自由でもやれることはいっぱいあると知った」と書かれていて、パラアスリート選手と直接関わることで感じた思いが書かれている<資料3>。体験と振り返りを積み重ねていくことで、児童の興味が広がったり、疑問が出てきたりと、障がいへの考え方が変わっていく様子が見られた。

点字を覚えたいと思った。
これから、点字を読める人が増えたら、点字を使ってる人により、話せていいなと思った。障がいを持ってるとあって、話したい。点字の良さなどを広めたい。
次は耳が不自由な人や、白杖を体験したいと思った。

<資料2：点字体験の振り返り>

これらの振り返りは直接的かつ豊富な体験があったからこその思いである。体験活動を充実させることで、児童の新たな気づきが生まれ、興味を広げることができた。

足が不自由でも佐藤選手は笑顔だったから足が不自由で、かわいそうとかを思わず不自由でもやれることにはびっくりして知った

<資料3：パラスポーツ体験の振り返り>

単元構想における第3次では、さらに深く障がいについて考えられるように、障がいのある人の生き方や思い、障がいのある人を支える人の思いに焦点を当てて、出前授業を設定した。例えば、陸上に取り組むパラスポーツ選手にこれまでの経験や、今大切にしていること、競技への思いなどを話していただいた。また豊田特別支援学校やみよし市社会福祉協議会、社会福祉法人「あさみどりの風」などの障がいのある人を支える仕事をしている人をゲストティーチャーとして招き、児童が知りたいことをインタビューする機会を設けた<資料4>。



<資料4：インタビューの様子>

インタビューをする前に障がいのある人を支える人に聞きたいことを考える機会を設けた。どんな仕事内容なのか、やりがいとは何か、なぜその仕事を選んだかなどの質問が多く出た。またみよし市社会福祉協議会の方にする質問の中には、私たちにできることは何かという主体的な思いを書いている児童もいた<資料5>。

2. みよし市社会福祉協議会の方に聞いてみたいこと

- ・やりがいとはなんでしょうか
- 私たちに何ができるのか
- ・どんな思いで仕事にはげんでいますか

<資料5：事前に集計した質問事項>

このことから、今までの学習の積み重ねによって障がいに対する理解が深まり、自分なら何ができるだろうという視点が生まれたのではないかと考える。

(2) 学びをまとめ、表現する第1回「アルコバレーノフェスタ」の開催(手だて③)

第2次では出前授業による体験活動を行ったあと、それぞれが興味をもったことについて調べ、情報の収集を行った。それぞれの児童のテーマに合わせて、1人やグループを組むなどして情報を集め、まとめていった。そして学年内で学びを発信し合う第1回「アルコバレーノフェスタ」を開催した。児童の一人は、点字体験から点字に興味をもち、点字の実態について調べた。すると、踏切の手前で点字ブロックが途切れてしまうことを知った。そこで踏切内に点字ブロックがない危険性を知ってほしいと考えた。危険性をより実感してほしいという思いから、白杖体験ブースを作り発表した<資料6>。また最後には「もし目の不自由な人が踏切で困っていたら、声をかけましょう」と呼びかけることができた。学びを発信する中で自分たちにできることを考えて発表する姿を見ることができた。



<資料6：白杖体験の様子>

他にも手話について調べた児童は、声と同時に手話により発表内容を伝えていた。パラスポーツに興味をもったグループは特にブラインドサッカーを調べ、実際に体験してもらおうブースを作った。体験した児童からは、「ボールの中のすずの音だけでボールを蹴るのがすごい」と話していた。様々な出前授業で体験活動をしたからこそ、体験が相手にわかりやすく伝わることを実感し、アルコバレーノフェスタでも体験や具体物を見せて発表する児童が多かったと言える<資料7>。

第1回アルコバレーノフェスタの振り返りには、「6年生だけではなく、下学年や家族に伝えたい」や「手話についてもっと知りたい」、「パラスポーツには他にどんな種類があるのか知りたい」などと書かれていた。さらにフェスタにはみよし市社会福祉協議会の方も参観してもらった。フェスタの様子を見た後

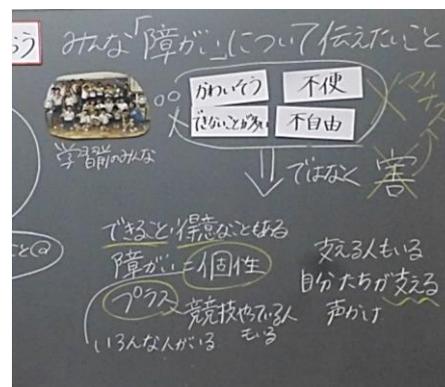


<資料7：アルコバレーノフェスタの様子>

に、「福祉を広めてほしいことや障がい者を前向きに扱ってほしいこと、障がいのある人を支える人についても知ってほしい」といった感想をいただいた。児童の振り返りや社会福祉協議会の方の感想をもとに、もう一度障がいについて考えることとした。そこでは、もっと多くの人に広めるために、第2回「アルコバレーノフェスタ」を開催したいという意見が児童から出された。

(3) 第2回「アルコバレーノフェスタ」の準備(手だて③)

第2回を開催するにあたって今一度障がいについて話し合う時間をつくるべきだと考え授業を行った。「みんなが障がいについて伝えたいことはどんなことだろう」という障がいへの思いに深く迫るための発問をした。その際に学習前の6月時点での障がいについてのみんなの考えを過去のワークシートを見ながら振り返った。その時は「かわいそう」や「不便、不自由」といったマイナスな考えばかりであった。今(11月)のみんなが伝えたいことはこれらのことなのか聞くと、多くの児童が首を横に振った。そこでどんなことを伝えたいのか聞くと、障がいは個性であり、できること得意なことがたくさんあるといった意見が出た<資料8>。どうしてそう思えるようになったのかを聞くと、パラスポーツ選手の前向きな様子を見たからという意見や体験することによって



<資料8：板書写真>

いろいろな人がいるって思ったからなどの意見が出た。体験を積み重ねたことで、児童の障がいへの見方の

変容があったと考えられる。

さらにアルコバレーノフェスタを見に来てもらう人の中には、自分たちが6月時点で抱いていた障がいへのマイナスイメージをもっている人もいないかもしれないという意見が出た。みんなはどうするのか問いかけると、少しでも障がいに対する見方・考えが変わるようにフェスタで伝えたいという振り返り記述が見られた。

この授業を行い、学習前と11月の自分の考えの違いを比較することで、今までの体験や調べ学習から得られた気付きや思いを改めて認識することができ、第2回アルコバレーノフェスタで伝えたい思いをクラスみんなで見つめることができ、自分にできることを実践しようとする気持ちの高まりが見られた。〈資料9〉。

(4) 第2回「みんなで繋ごう アルコバレーノフェスタ」保護者に向けて開催(手だて③)

第2回アルコバレーノフェスタを開催したことには大きく2つ理由がある。1つ目は伝える対象を広げるためである。第1回アルコバレーノフェスタでは、6年生同士で発表を行った。児童の振り返りを見ると、「下学年や保護者に学んだことを伝えたい」と書かれていた。そのため伝える対象をさらに広げて学びを発信できないかと考えた。2つ目は、障がいに対する思いや支え合いの視点をもたせたいと考えたからである。第1回では、手話の歴史やパラスポーツの種類、競技用車いすについてなどの知識的な発表が多かった。そこで、第2回ではパラスポーツの選手の生き方や思い、障がいのある人を支える人の思い、自分たちにできることなどの思いや生き方に焦点をあてて表現したいと考えた。思いに迫ることで、より深く障がいについて向き合うことができるのではないかと考え、第2回を設定した。

第2回では児童の声でアルコバレーノフェスタを作っていきたいと考え、フェスタの名前も児童から募集した。それぞれの思いが込められた名前が多く集まった。その中から学年で投票を行い、「みんなで繋ごう アルコバレーノフェスタ」に決定した。繋ぐという言葉が児童から出たこと、またそれに賛同する児童が多かったことから、自分たちで学びを広げようとする姿を表出することができた〈資料10〉。

第2回は、それぞれの興味に合わせて、学年合同でグループを組んで情報を収集し、まとめた。そのなかの1つのグループは、特別支援学校のことについて調べた。第3次で行った出前授業のときに、豊田特別支援学校の先生にインタビューで聞いた内容をもとにして劇を作り、発表した。「障がいの有る無しで特別扱いほしくない」といった先生の言葉が印象に残り、発表のときにもその言葉を先生役になって保護者に伝えていた。また以前と今の障がいに対する考え方の変化を伝え、障がいは不自由、不便ではなく、個性であるということを伝えていた〈資料11〉。さらにみよし市社会福祉協議会について詳しく調べたグループもあった。みよし市社会福祉協議会で借りることのできる車いすは募金や寄付金で購入されていることを聞き、自分たちにできることを考え、保護者に募金の呼びかけを行った。また保護者に募金を呼びかけるだけでなく、後日自分から募金をもって来る児童も複数いた。自分のできることを考え、実行に移す姿があった。

また児童ができたことや改善点を振り返ることができるように、保護者に感想アンケートをお願いした。

体が不自由な人・脳の発達がおかれている人
 体が思うように動かせない人
 障がい者..のこと
 病気などで不自由な人



障がいも、一つの個性で決してマイナスなことではないので、フェスタでも、あまりマイナスな言葉や表現は使わずに発表したいなと思いました。そして、フェスタに限らず、色々な人が障がいのことをマイナスに捉えていると思うので、家族や学校の人にもぜひ、私たちと同じ一人の人間として接してほしいと伝えたい

〈資料9〉：児童Aの障がいに対する見方の変化

名前	理由
みんなで繋ごうアルコバレーノフェスタ	第二回目は、今までの学習をみんなに共有「繋ぐ」という意味で、「みんなで繋ごうアルコバレーノフェスタ」にした。
ソーレフェスタ	太陽はイタリア語で「ソーレ」といい、太陽のように支えられる人になれたらな、という意味を込めました。
ワタドリフェスタ	みんなの思いを届けるということ
チャーミングフェスタ	障がいも個性で、魅力があると思ったから
ともに歩く connect フェスタ	connect は英語で繋がるという意味なので、障がい者と私たちが支え合って、繋がって生きていくという意味をこめて考えました。
未来祭	未来には障がい者も障がいがない人も平等に暮らせるようにという思い。

〈資料10〉：名前募集アンケート

また以前と今の障がいに対する考え方の変化を伝え、障がいは不自由、不便ではなく、個性であるということを伝えていた〈資料11〉。さらにみよし市社会福祉協議会について詳しく調べたグループもあった。みよし市社会福祉協議会で借りることのできる車いすは募金や寄付金で購入されていることを聞き、自分たちにできることを考え、保護者に募金の呼びかけを行った。また保護者に募金を呼びかけるだけでなく、後日自分から募金をもって来る児童も複数いた。自分のできることを考え、実行に移す姿があった。



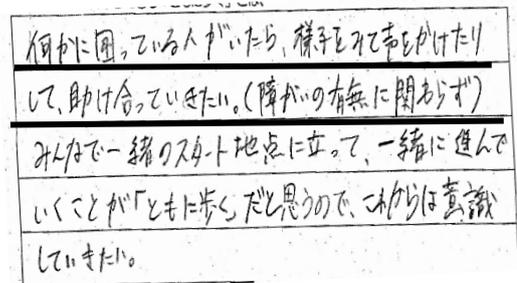
〈資料11〉：発表の様子

また児童ができたことや改善点を振り返ることができるように、保護者に感想アンケートをお願いした。

保護者の声の多くが、「しっかり調べられてよかった」という肯定的な意見だった。その一方で、声の小ささや、「体験ブースでは児童の手本が欲しかった」、「タブレットばかり見ている目線が合わなくて寂しかった」という意見もあった。すべての感想を児童に見せたことで、多くの温かい言葉に自信をつけ、自分ができることを振り返り、次の発表はどうすればよいかという今後の活動への意欲を高めることができた。

(5) 第2回「みんなで繋ごう アルコバレーノフェスタ」5年生に向けて開催(手だて③)

保護者に向けたフェスタで出てきた良かった点、改善点をもとに、5年生に伝えるにはどうすればいいのかを話し合った。手話と心のバリアフリーについて調べていたグループは、保護者に向けての発表では、クイズ形式で楽しく学べるようにしたかったのに、あまり盛り上がりなかったことを課題にしていた。その課題を解決するために、話し合いを進めた。伝える相手が保護者から5年生に変わるから、より楽しく学べるようにしたいという意見が出た。そこからクイズでは効果音を付けることや、クイズは名探偵を登場させて、盛り上がるような工夫をした。内容的には大きくは変わらないが、前回の反省をいかし、もっとこうしたいという強い思いをもつことができた。また5年生からも感想をもらい、「障がいも一つの個性ということがわかった」、「障がいに対する考えが変わった」「生活の工夫がたくさんある」などが書かれていた。これを見て、自分たちの学びの繋がりを実感することができた。



困っている人がいたら、様子を見て声をかけたりして、助け合っていたい。(障がいの有無に関わらず) みんなで一緒にスタート地点に立って、一緒に進んでいくことが「ともに歩きたい」思うので、みんなは意識していきたい。

<資料12 児童Aの振り返り>

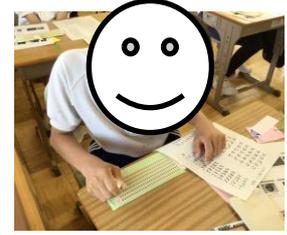
「みんなで繋ごうアルコバレーノフェスタ」を終えて、今までの活動を振り返った。保護者から5年生へと対象を変えて2回行うことで、1回目ではできなかったことを2回目で改善する様子が見られた。また、児童の振り返りから、「障がいの有無に関わらず、困っている人を助けたい。みんなで一緒にスタート地点に立ってともに歩くことを意識したい。」ということが書かれていた。発表して完結ではなく、今までの学びを自分事としてとらえ、これからどう自分が行動したいかが記されていた。このことから、学びを発信する機会をくり返すことで、自分にできることを実践しようとする姿につながったと言える<資料12>。

(6) みよし市 SDGs フォトコンテストの応募(手だて④)

複数の出前授業を行い、児童には様々な気づきや新しい視点が生まれた。例えば、車いすに乗るときには足を支えてあげることや、段差の上がり方を新しく学んだ。点字体験では、文字の表し方を知ったり、身近な点字はどこにあるのかと興味がわいたりした。学んだことをこれからどうしていきたいか児童に聞くと、もっと他の人にも伝えたいという声が上がった。より多くの人に自分の学びを発信できるように、みよし市 SDGs フォトコンテストへの応募を設定した。今までの体験の写真から1枚をグループで選び、タイトルをつけ、伝えたい思いとともに応募をした<資料13>。

「点字を学ぶわたしたち」

6年生で睦の会の方達と点字を打つ体験をしました。点字を打つのは大変だったけれど、目が不自由な人は点字がなければ不便な暮らしになり、困ってしまう。例外はない！みんながしあわせにより良く過ごせる世界へ！



<資料13：実際の応募>

応募の結果として、6年2組は3つの賞を受賞した。表彰式があり、みよし市教育委員会やみよし市協賛企業から賞状を受けとったことで、児童は自分たちの発信が広がったという達成感を得ることができた<資料14>。また受賞した作品は、みよし市の広報誌に掲載されたり、ショッピングセンターなどで飾られたりして、自分たちの学びが実際に発信されていることを目の当たりにすることができた。発信してみても率直な思いを児童に聞くと、「うれしい、他にもいろんなことを広めたい。」という声が上がった。



<資料14：表彰式の様子>

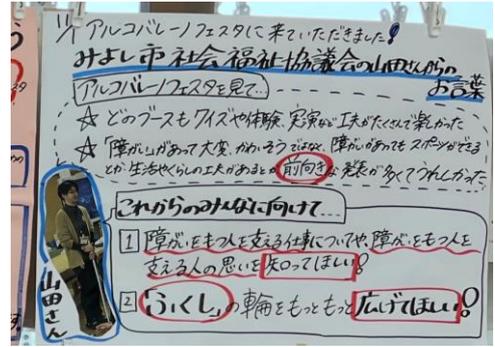
(7) みよし市社会福祉協議会の山田さんとの1年間の関わり (手だて②)

学習前の児童は、福祉という言葉を知っていても、実際何かと言われると説明するのが難しかった。そこで福祉について学んだり、さらにみよし市の福祉の取り組みを知ったりすることができるように、みよし市社会福祉協議会の山田さん(以下山田さん)と連携し、年間を通じて一緒に学習を進めた(資料15)。

①車いす体験、障がいについての出前授業
②パラスポーツ体験の参観
③第1回アルコバレーノフェスタ
④出前授業 支える人のインタビュー
⑤みんなで繋ごうアルコバレーノフェスタ
⑥車いす 寄贈式

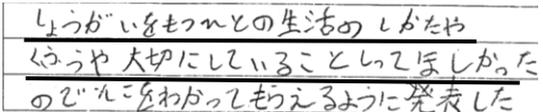
<資料15: 年間のかかわり>

初めての出会いは、①車いす体験の出前授業である。車いす体験とともに障がいとは何かという話をしていただいた。そのときに、「障がい」って聞いてどんなことをイメージするかと山田さんが児童に聞いた。多くの児童が、不自由、かわいそう、不便などのマイナスなイメージをもっていた。その後、山田さんは、障がいとはだれにでもあることで、特別なことではないという話をした。また障がいについて一緒に学んでいこうと児童に呼びかけた。



<資料16: 山田さんからのお言葉>

次に第2次で行った③第1回アルコバレーノフェスタでは児童の発表を見て、よかったところやアドバイスを教えていただいた(資料16)。この言葉によって児童は福祉に携わる山田さんに認めてもらえたことが嬉しく、さらによくしようという思いが出てきた。またこれからのみんなに向けて「ふくしの輪を広げよう」というミッションをもらい、児童の心にやる気が宿った。山田さんは障がいを「前向き」に扱うことを大事にしている、児童の前でもその話をよくしていた。それが児童にも伝わり、できないことなどに目を向けるのではなく、できること、工夫を伝えようという気持ちが芽生えていった(資料17)。



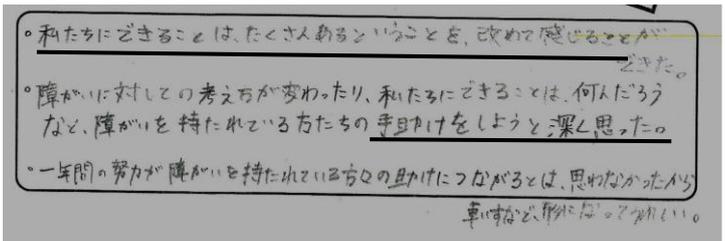
<資料17: 児童の思い>

また④出前授業 支える人のインタビューでは、障がいのある人を支える職業としてインタビューに答えていただいた。みよし市の取組や、学校で行う赤い羽根共同募金がどのように使われるかを説明してくれた。また、みよし市社会福祉協議会で車いすを借りたことがある児童がいて、車いすはどのように用意しているかの質問が出た。車いすは市民からの募金や寄付で購入することができるということを教えていただいた。このインタビューをきっかけにみよし市社会福祉協議会の取組に興味をもち、調べたいという児童も出てきた。さらに自分たちにできることを考え、保護者に向けて募金を呼びかけるグループも出てきた。このように山田さんから多くの助言や新しい情報を得たことで、児童の学びが広がり、行動力が高まったと考える。



<資料18: 車いす寄贈の様子>

児童のはたらきかけによって集まった募金とみよし市 SDGs フォトコンテストで受賞した賞品とを合わせて、車いすを購入した。またそれをみよし市社会福祉協議会に寄贈することができた(資料18)。児童自身の取組や思いが車いすという形になり、1年間関わってきた山田さんに直接渡すことができ、児童の達成感や自信に繋がった。また今後も自分ができることを見つけていきたいという思いをもつことができた(資料19)。



<資料19: 児童の振り返り>

このことから、山田さんとの1年間の関わりによって福祉の考え方が広がり、自分たちができることやこれからの生き方を考えていくことができるようになったと考える。

5 成果と今後の課題

(1) 仮説1の検証

第2次では車いす体験、点字体験、パラスポーツ体験などの複数の出前授業による体験活動を設定したことで、資料2のように体験したからこそ得られる児童の気付きや新たな興味が生まれた。また第3次の出前授業では障がいのある人を支える人の思いに焦点を当てて出前授業を行うことで、助け合いの大切さに気付き、自分ができることは何かと模索する姿が見られた。このことから、様々な出前授業を設定することで、障がいに対する考え方が広がり、自己の生き方にいかすことができたと考えられる【手だて①】。

また、ゲストティーチャーであるみよし市社会福祉協議会の山田さんと1年間の関わりを設定した。これによって、はじめは障がいについてマイナスなイメージをもっていた児童が、山田さんの言葉をきっかけに徐々に障がいを前向きにとらえ始め、それをアルコバレーノフェスタで発表することにつながった。発表の様子も見に来ていただき、良かったところや助言をくださった。それにより児童の学びの意欲がさらに高まった。またみよし市社会福祉協議会で貸し出しできる車いすが、寄付や募金によって購入されていることを山田さんから聞き、自分たちにできる行動を考え、募金活動を行い、集まった募金で車いすを購入し、寄付することができた。このことから、山田さんとの1年間の関わりによって福祉の考え方が広がり、自分たちにできる募金活動に取り組み、これからの生き方を考えていくことができたと考えられる【手だて②】。

(2) 仮説2の検証

まとめ、表現する場面としてアルコバレーノフェスタという発信する場において対象を変えて複数回設定した。第2次で行った第1回アルコバレーノフェスタは出前授業による体験活動を通して自分が関心をもったことについて情報を集め、学年間で発表した。発表後の振り返りには、「保護者や下学年に伝えたい」「今度は義手について学びたい」などが書かれていた。このことから伝える相手を広げ、さらに学びを深めるために第3次では第2回アルコバレーノフェスタを設定した。第2回では障がいのある人の思いや生き方、障がいのある人を支える人の仕事や思いに焦点をあてて発表した。また保護者と5年生を伝える相手として設定した。保護者から5年生へと対象を変えて2回行うことで、1回目から2回目では発表を改善する様子が見られた。また、児童の振り返りには、「自分たちができることを見つけたい、募金に参加したい」などのこれからの行動が書かれていた。発表して完結ではなく、今までの学びを自分事としてとらえ、これからどう自分が行動したいかが記されていた。このことからまとめ、表現する場面において、学びを発信するアルコバレーノフェスタの機会を積み重ねることで、伝えたい気持ちや、行動力が高まったと考えられる【手だて③】。

校内だけではなく多くの人に学びを発信する機会として、みよし市SDGsフォトコンテストに応募した。応募の結果、賞を受賞することができた。受賞作品は広報誌やショッピングセンターなどに掲載され、児童の思いが発信されたことを児童自身で実感することができ、達成感につながった【手だて④】。

(3) 成果と今後の課題 ◎成果 △課題

2つの仮説に基づいて総合的な学習の時間を進めたことで、次のような成果と課題が得られた。

- ◎出前授業を設定したことで、体験したからこそその気づきや疑問が生まれる良い機会になった。また複数の出前授業を設定することで、障がいについて様々な視点で学ぶことができた。
 - ◎まとめ、表現する場面としてアルコバレーノフェスタという発信する場において対象を変えて複数回設定したことで、発表を改善する様子やこれからどう自分が行動していきたいかなどを考えることができた。
 - △出前授業の間隔があくと児童の学びが止まってしまった。出前授業は探究を深める良い手だてだが、校内での他の行事などの兼ね合いがあり、スケジュール設定の難しさを感じた。出前授業の中には事前に打ち合わせが必要な場合もあり、なかなか円滑に出前授業を組み込むことができなかった。このことから、児童の様子を想定した前もった計画が必要だと考える。
 - △児童の意識が、障がいのある人だけではなく、身の回りのすべての人を大切にしていこうというところまで広げきれなかった。みんなの学びは障がいのある人だけなのかなどの問いかけをして、すべての人に目を向けられるような声かけができればよかったと考える。
- 以上から、今後の総合的な学習の時間では、児童がこれからの生き方に目を向け、行動できるような授業を作っていけるように尽力したいと考える。